

『篁物語』 「簾ごしに几帳たててぞ読ませける」

——平安時代物語に見る「兄妹間の隔て」から——

湯 浅 幸 代

一 兄妹を隔てる「御簾と几帳」

『篁物語』は、小野篁とその異母妹との悲恋を主軸とする作り物語であり、冒頭から二人の出会いが次のように語られている。

親のいとよくかしづきける人のむすめありけり。女のするさえのかぎりしつくして、今は「書読ませた」とて、「博士にはむつまじからん人をせん」とて、異腹の子の、大学の衆にてありけり、異腹なりければ、うとくて、「あひ見ず」などありけれど、「知らぬ人よりは」とて、簾ごしに几帳たててぞ読ませける。（『篁物語』二三五頁）

1

親から非常に大切に育てられた娘は、女性としてのあらゆる教養を身に付け、今度は、親が漢籍を学ばせようとし

て、大学の学生であつた異母兄・篁を師として呼んだ。親の方は、「娘が親近感を持ち安心して学ぶことができる人」と考えて選んだのが異母兄であつたが、それでも腹違いのために疎遠に感じていた娘は、異母兄と会うことを拒否する。しかし、「全く知らない人よりは」ということで、結局、御簾と几帳とで二人を隔てた形で漢籍の講義が始まるのである。

この冒頭部は、親と娘とで、異母兄・篁への認識に齟齬があつたことを示しているが、二人の間に置かれた「御簾と几帳」には、どのような意味があつたのだろうか。実は、この点については、注釈書において解釈の揺れが見られる。

日本古典文学大系『篁物語』（以下『大系』と表記）では、本文傍線部に対し、「親しい間からでない者は、すだれ越しに、几帳をへだてて話をするのが、当時の習い。」⁽²⁾と注しており、『篁物語新講』（以下『新講』と表記）では、このような隔てを、「当時の男女の生活の姿」と説明した上で、「この妹の親は男に懸念していたため、簾越しに几帳までたてて男の接近を拒んだわけで、その意味では篁にはうわついた噂があり、懸念される所があつた風流男としての篁の像がやはり史実には見られないが、存在した可能性⁽³⁾がある。」と注している。

『大系』は、「御簾と几帳」とを、「親しい間からでないための措置」とするからには、親の意向というよりは、娘のために親が用意させたものであり、『新講』は、親が娘と篁との仲を心配して用意させたとする点、意味合いが異なるが、双方、それらが通常の「兄妹の隔て」以上のものであつたと理解する点は一致している。

一方、このような「御簾と几帳」との隔てを、当時の兄妹（姉弟）間において、通常のものとして理解するのが、『小野篁集全釈』⁽⁴⁾（以下『全釈』と表記）である。

新講B（『童物語新講』）は、「簾越しに几帳までたてて男の接近を拒んだわけで」と説明するが、これは誤解である。女性は、親しい人にも几帳を隔てて会うのが普通であり、源氏物語における夕霧と玉鬘は、姉弟ではないと判明した後も、人の中にたててのよそよそしい対話ではなく、以前、実の姉弟として会っていた時のまま「御簾に几帳添へたる御対面」をしていた（藤袴巻）。「御簾の内側に几帳を一つ置いて直接本人同士が話をする。これが実の姉と弟の会い方である」と『源氏物語評釈』は説明している。（『小野篁集全釈』五一・五三頁）

『全釈』は、『新講』の「簾越しに几帳までたてて」と言う点について、まず「女性は、親しい人にも几帳を隔てて会うのが普通」と否定するが、実際、几帳が親しい間柄であっても用いられたことは、『源氏物語』⁽⁵⁾に例が見られる。

夏の御住まひを見たまへば、時ならぬけにや、いと静かに見えて、わざと好まじきこともなく、あてやかに住みなしたまへるけはひ見えわたる。年月にそへて、御心の隔てもなく、あはれなる御仲らひなり。今はあながちに近やかなる御ありさまもてなしきこえたまはざりけり。いと睦ましく、ありがたからむ妹背の契りばかり聞こえかはしたまふ。御几帳隔てたれど、すこし押しやりたまへば、またさておはす。縹はげにほひ多からぬあはひにて、御髪などもいたく盛り過ぎにけり。

（『初音』一四六・一四七頁）

右記は、初めて正月を迎えた六条院における、光源氏とその妻・花散里の対面場面であり、二人の間には几帳がた

てられている。ただし、光源氏が几帳を少し押しかけて見た花散里の姿は、容貌の衰えを示しており、あえて花散里が几帳ごしの対面を望んだようにも思われる。しかし、几帳のあることを、特に光源氏が不快に感じた様子もないので、共寝をしなくなった夫婦のありようとしては、このような対面も特別ではなかったのだろう。また、男女のきょうだいに關しては、次のような例がある。

時雨いたくしてのどやかなる日、女一の宮の御方に参りたまへれば、御前に人多くもさぶらはず、しめやかに、御絵など御覽するほどなり。御几帳ばかり隔てて、御物語聞こえたまふ。
 (「総角」三 三頁)

右記は、同母姉弟である女一の宮と匂宮の対面を示し、二人は几帳のみの隔てで直接言葉を交わしている。この記述は、『全釈』が従う『源氏物語評釈』(以下『評釈』と表記)の説明にある「御簾の内側に几帳を一つ置いて直接本人同士が話をする」⁽⁶⁾という男女間のきょうだいに於ける通例とは異なるが、「御几帳ばかり」とあるからには、この対面が通常の作法でないことを語り手も認識しているということか。しかし、このような対面の後、匂宮が戯れながら女一の宮に恋心をほめかすところを見ると、この「几帳」は、そのような気持ちを作り出す「隔て」として、あえて記述されているように思える。やはり『篁物語』においても、兄妹間に置かれたと記される「御簾と几帳」には、何か特別な意味があるのではないだろうか。

そこで、本稿では、この「御簾と几帳」の意味を明らかにすべく、他の平安時代物語における「兄妹(姉弟)間の隔て」について検討してみたい。

二 平安時代物語に見る兄妹間の隔て(1) 『うつほ物語』『狭衣物語』の場合

『篁物語』のように兄妹間の恋情をテーマとする物語として、『伊勢物語』四九段の異母兄妹間の贈答が有名だが、長編物語では、『うつほ物語』の仲澄とあて宮、『狭衣物語』の狭衣と源氏の宮(実際は従兄妹)が代表的と言えよう。双方、男君からの一方的な懸想であるところが共通するが、たとえば、『うつほ物語』には、次のような場面がある。

あて宮、「心憂し」とは思せず、宮聞こえ給へば、渡り給ふ。宮・おとどの住み給ふ北のおとどに臥し給へり。

あて宮、その頃、御かたちの盛りなり、丈五尺に今少し足らぬほど、いみじく姿をかしげに、御髪(1)の麗しくをかしげに、清らなる黒紫の絹を瑩せること、生ひたる限り、未まで至らぬ筋なし、めでたきこと限りなし。今日は

まして、心殊に見え給ふ。兵衛の君・孫王の君ばかり御供にておはしたり。侍従(2)の君、見奉り給ひて、とみに物も聞こえ給はず。からうして、「今日や参り給ふ。御送りをだに、え仕つまつらずなりぬること。生きてまた対面

賜はらむこと、難くもあるかな」と、涙を流して聞こゆ。あて宮、「心にもあらずのみなむ。いでや、などかはかくのみはものし給はむ」。侍従、「なほ、え侍るまじきにこそ侍るめね。よろづのこと、心細く悲しきこと」と

聞こゆ。あて宮、「さな思し入りそ」とて立ち給ふ。

臥しまろび唐紅に泣き流す涙の川にたぎる胸の火

と書きて、小さく押し揉みて、御懐に投げ入る。あて宮、「散らさじ」と思して、取りて立ち給ひぬるを見るま(3)

に、絶え入りて息もせず。

（「あて宮」三五六頁）

あて宮巻では、物語のヒロイン・あて宮の東宮参入が決まり、あて宮に求婚していた者たちの嘆き悲しむ様子が描かれる。なかでも同母兄・仲澄の悲嘆は尋常でなく、床に臥してしまったため、参内の準備を進める母・大宮も、仕方なく、あて宮との対面を望む仲澄の意向を聞き入れる。あて宮は、不快に思いながらも兄・仲澄との対面を果たすのであるが、そこには何らかの隔てがあったように描かれていない。当然のこととして省略された可能性も考えられるが、あて宮の容貌がいま盛りであると語られ、髪的美しさなどが詳細に描写されることは、やはりこの姿を仲澄が見たことを暗に示すのではないだろうか。傍線部（1）には、仲澄があて宮と対面した時、すぐには物を言い出せなかつたと記されているが、それは、あて宮の盛りの容貌に加えて、この日、宮中に参内するために調べられた美しさ、また内面から滲み出る輝きを見て、息をのんだのだと思われる。その後、二人は会話し、あて宮が立ち去る折、仲澄は自分が詠んだ歌を傍線部（2）のようにあて宮の懐に投げ入れ、さらに傍線部（3）では、その手紙を他者に見られぬよう取って立ち去るあて宮の様子を仲澄が見ている以上、二人とも御簾内にいたことは間違いなく、また几帳こしであつたかも疑わしいと言える。

ただし、状況としては、宮中へ参内間近のあて宮が、具合の悪い兄・仲澄を思いやって、このような隔てのない対面を実現させたとも考えられるので、これをもって通例かどうかは判断しがたい。次に、『狭衣物語』⁹の場合を見てみよう。

「光源氏の、『身も投げつべき』とのたまひけんも、かくや」と、独り見給ふも飽かねば、侍童の、おかしげなる、小さきして、一枝つつ折らせ給ひて、源氏の宮の御方に持て参り給へれば、御前には、中納言、中将などいふ人々、絵かき、色どりなどせさせ給ひて、宮は御手習などせさせ給ひて、添ひふしてぞおはしける。「この花どもの夕映は、常よりもおかしくさぶらふものかな。東宮の、『盛りには、必ず見せよ』とのたまはせしものを。いかで、一枝御覽せさせてしがな」とて、うち置き給へるを、宮、少し起きあがり給ひて、見おこせ給へる御まみつらつきなどの美しさは、花の色々にも、こよなふ優り給へるを、例の胸さわぎて、花には目もとまらず、つくづくとまぼらせ給ふ。「花こそ春の」と、とり分きて山吹を取り給へる御手つきなども、世に知らずつくしきを、人目も知らず、我が御身に引き添へまほしう思さるる様で、いみじきや。

(巻一、二九・三頁)

狭衣にとつて、源氏の宮は、本来、従妹であるのだが、狭衣の母・堀川の上の養女となったことで、二人は幼い頃から同母兄妹のように育てられた。傍線部は、源氏の宮の様子、行動を示す部分であるが、この場面における語り手の視線は狭衣のそれに寄り添っており、源氏の宮は、狭衣の視野内にいることがわかる。そして藤と山吹を一枝ずつ侍童に折り取らせた狭衣は、その枝を持って源氏の宮の元を訪れ、その枝を見せるのであるが、源氏の宮の目元、頬の美しさ、山吹の枝を取るその手つきまで狭衣は見通せている。そして最後に、「人目もはばからず、自分の方へ宮を引き寄せたくなる」と、狭衣が感じるからには、そのような行動が可能な場所に二人とも居合わせていたことになる。つまり、二人の間は、御簾や几帳によって隔てられてはいなかったと考えるのが自然だろう。

このように、他の作品を見てても、「御簾と几帳」とが兄妹を隔てる通例とは必ずしも言い難いように思われる。しか

しながら、仲澄とあて宮、狭衣と源氏の宮は、ともに幼い頃から「同母兄妹」として育てられており、その点、ある程度成長してから出会った「異母兄妹」である篁と異母妹の場合とは異なっている。そこで、次章では、異母兄妹も含め、様々な関係性にある兄妹（姉弟）が登場する『源氏物語』の例を見ていきたい。

三 平安時代物語に見る兄妹間の隔て（二） 『源氏物語』の場合

『源氏物語』に見る同母兄妹間の隔てについては、次の例が参考になる。

藤壺のまかでたまへる三条宮に、御ありさまもゆかしうて、参りたまへれば、命婦、中納言の君、中務などやうの人々対面したり。けざやかにもてなしたまふかなとやすからず思へど、しづめて、おほかたの御物語聞こえたまふほどに、兵部卿宮参りたまへり。略。暮れぬれば御簾の内に入りたまふを、うらやましく、昔は上の御もてなしに、いとけ近く、人つてならでものをも聞こえたまひしを、こよなう疎みたまへるもつらうおぼゆるぞわりなきや。

（『紅葉賀』三二八・三二九頁）

光源氏が出産のため退出した藤壺の宮の元を訪ねた折、藤壺の同母兄である兵部卿宮が訪れる。光源氏は、藤壺が警戒していたこともあり、御簾の外で女房を介しての会話であったが、兵部卿宮は光源氏と対面した後、日が暮れたことから妹・藤壺のいる御簾の内へと入っていく。かつて、幼い頃は自分も御簾の内を許されていただけに、一層、

源氏は兵部卿宮を羨ましく感じている。

この時の藤壺と兵部卿宮の対面については、几帳の有無など定かでないが、親しい間柄でも几帳はたてられるのだから、むしろ、御簾の内か外かという点が、兄妹間の隔てを考える上で重要なものではなかるうか。次に、異母兄妹である夕霧と明石の姫君の場合を見てみたい。

中将の君を、こなたにはけ遠くもてなしきこえたまへれど、姫君の御方には、さしもさし放ちきこえたまはず
馴らはしたまふ。わが世のほどは、とてもかくても同じことなれど、なからむ世を思ひやるに、なほ見つき思ひ
しみぬることどもこそ、とりわきてはおほゆべけれど、南面の御簾の内はゆるしたまへり。

(「螢」二二六・二二七頁)

光源氏は、夕霧を、紫の上の居所には近づけさせなかったが、異母兄妹である明石の姫君とは親しくさせ、姫君方の御簾の内に入ることを許していた。つまり、逆に許しがなければ入れなかったことになる。同母兄妹とは異なり、幼い頃から一緒に育ってこなかった異母兄妹は、やはり御簾の外で対面するのが通例であったようである。先の「評釈」で採り上げられていた夕霧と玉鬘も、玉鬘が内大臣を実父とすることが世に知られるまでは、異母姉弟の関係であった。その二人の対面については、次のように語られている。

殿の中将は、すこしけ近く、御簾のもとなどにも寄りて、御答へみづからなどするも、女はつつまじう思せど、

さるべきほど人々も知りきこえたれば、中將はすくすくして思ひもよらず。

〔胡蝶〕一七四・一七五頁

夕霧は、玉鬘のいる御簾の内には入っていない。ただ、その傍で、直接玉鬘と言葉を交わすのである。そしてお互い他人であることをわかつている玉鬘だけが、女房を通さず直接会話することを恥ずかしく感じている。また、姉弟ではないことが判明した後も、「なほ御簾に几帳添へたる御対面は、人づてならでありけり。」〔藤袴〕三三九頁）とあり、二人は御簾と几帳とで隔てられてはいるが、直接言葉を交わしており、対面の作法は以前通りであるという。つまり、ここでは、『評釈』の言つとおり、「御簾の内側に几帳を一つ置いて直接本人同士が話をする。これが実の姉弟の会い方である」と言えるが、それはあくまで異母兄妹（姉弟）における場合なのである。

また、なぜこのように同母兄妹の対面とは作法が異なるかと言えば、それは、おそらく異母兄妹は、同母兄妹とは異なり、恋愛・結婚が可能だったからではないだろうか。たとえば、先述したように匂宮は、同母姉である女一の宮に対し、「せめて異母姉弟であつたなら」と思い、恋情をほめかすように『伊勢物語』四九段を踏まえた和歌を贈っている。実際、平安初期には、桓武天皇を父に持つ平城天皇と朝原内親王・大宅内親王、嵯峨天皇と高津内親王、淳和天皇と高志内親王が、中期には、宇多天皇を父に持つ敦慶親王と均子内親王が、それぞれ異母兄妹間で結婚している。また、それらが特殊な例であつたとしても、確かに物語の中では、匂宮が言つように、異母姉弟（兄妹）であれば、同母のそれよりは可能性があつたように語られているのである。しかし、光源氏は、明石の姫君と夕霧に対し、同母兄妹のような親しい関係性を築くことを期待して夕霧に御簾の内を許した。そして期待通り、源氏の死後も、夕霧は中宮となつた明石の姫君を力強く後見していくのである。

以上、平安時代物語に見る「兄妹（姉弟）間の隔て」について、これまでの検討をまとめておく。

同母兄妹の場合、直接の会話、御簾の内が許され、場合によっては、几帳なしで対面できる。

異母兄妹の場合、御簾と几帳とで隔てた上で、直接会話がなされる。ただし、親の計らいにはよっては、同母兄妹と同様の対面が可能である。

これらの結果を踏まえて、最後に『篁物語』の篁と異母妹の例を考えてみたい。

四 『篁物語』における異母兄妹間の隔て 恋の暗示として

再度、『篁物語』冒頭部の記述を見てみよう。

親のいとよくかしづきける人のむすめありけり。女のするさえのかぎりしつくして、今は「書読ませた」とて、「博士にはむつまじからん人をせん」とて、異腹の子の、大学の衆にてありけり、異腹なりければ、うとくして「あひ見ず」などありければ、「知らぬ人よりは」とて、簾こしに几帳たててぞ読ませける。（『篁物語』二五頁）

物語の篁と娘は、異母兄妹の関係にあるので、「簾（こし）に几帳たてて」という講義のあり方は、『全釈』の言うとおり、一見、自然なものである。しかし、親は、わざわざ「親しい人を」ということで篁を呼んだのであり、親にとつては、篁と娘が同母兄妹のような絆をもって、学問を始めてくれることを期待したのかもしれない。また、「全くの他人よりは」と、篁を師として迎えるからには、身内として信頼していたのだろう。おそらく、篁と娘の間に色恋沙汰が起こるうなど全く予想していなかったはずだ。実際、妹に恋心を持ち、後に妹を挟んで兵衛佐とライバル関係になった篁は、激しく嫉妬し、兵衛佐の使いに「妹は男に盗まれた」と嘘をつくなど、『新講』の言うような恋に手馴れた「風流男としての篁の像」は物語に見いだしたい。むしろ、親は、学問一筋の篁なら安心だと考えていたのであって、やはり「簾（こし）に几帳をたてる」学問のやり方は、そのように考える親とは異なり、「異母兄妹」であることを強く意識する娘の気持ちに配慮したと考えるべきではないだろうか。

『つつほ物語』や『狭衣物語』において、兄から懸想される妹たちは、幼い頃から一緒に育ち、その姿を容易に見られるほど気を許しているため、いくら恋情を訴えられても、兄を「異性」として見ることができず、ひたすら拒否し続けることになる。しかし、ある程度成長してから異母兄と会うことになった娘は、最初からこの兄に対して「隔て」を感じ、物理的な「隔て」を求めた。つまり娘は、異母兄・篁を「身内」ではなく、「異性」として見ることが可能だったのであり、最終的に篁の気持ちを受け入れたことも、この点が深く関係しているのではないだろうか。

もし、篁と異母妹が、親の意向通り、同母兄妹間のような親しさをもって、御簾などの隔てなく講義をしていたならば、二人の間に恋情が芽生えることはなかったかもしれない。『篁物語』における「御簾と几帳」には、二人が越えるべき「隔て」（兄妹から男女へ）が、最初から示されていたのである。

注

- (1) 遠藤嘉基校注『日本古典文学大系』『篁物語』(岩波書店、一九六四年)による。以下、『篁物語』本文の引用は同書。表記は一部私に改めた。
- (2) 『日本古典文学大系』『篁物語』(岩波書店)一五五頁
- (3) 石原昭平・根本敬三・津本信博『篁物語新講』(武蔵野書院、一九七七年)八頁
- (4) 平野由紀子『小野篁集全釈』(風間書房、一九八八年)
- (5) 新編『日本古典文学全集』『源氏物語』(小学館)による。以下、『源氏物語』本文の引用は同書
- (6) 玉上琢彌『源氏物語評釈』第六卷(角川書店)一四一頁
- (7) 「むかし、男、妹のいとをかしげなりけるを見をりて、
うら若みねよげに見ゆる若草を人のむすばむことをしぞ思ふ
と聞えけり。返し、
初草のなごめづらしき言の葉ぞつらなくものを思ひけるかな」
(新編『日本古典文学全集』『伊勢物語』小学館、一五五・一五六頁)
- (8) 室城秀之校注『うつほ物語』(おうふう)による。以下、『うつほ物語』本文の引用は同書
- (9) 『日本古典文学大系』『狭衣物語』(岩波書店)による。以下、『狭衣物語』本文の引用は同書。表記は一部私に改めた。
- (10) 「すこしももの隔てたる人と思ひきこえましかばと思すに、忍びがたくて、
若草のねみむものとは思はねどむすばはれたる心地こそすれ」(総角)三〇四・三〇五頁)
(ゆあさ・ゆきよ/本学専任講師)